

アジアでのアール・ブリュット調査及び専門家交流事業
報告書

アジアでのアール・ブリュット調査及び専門家交流事業 報告書 目次

事業名：アジアでのアール・ブリュット調査及び専門家交流事業

実施期間：2016年4月1日～2017年3月31日

主催：社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

助成：平成28年度 国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成

目次

1. 事業概要
2. アール・ブリュット作品調査
 - 2-1. タイ王国でのアール・ブリュット作品調査について
 - 2-2. 事業成果
3. アール・ブリュット専門家交流
 - 3-1. 両国専門家による意見交換について
 - 3-2. タイ人専門家招聘プログラム実施報告
 - 3-3. アール・ブリュット国際フォーラム（日本・滋賀）での講演実施報告
 - 3-4. シンポジウム“アール・ブリュットを考える”（タイ・バンコク）実施報告
 - 3-5. 事業成果
4. アール・ブリュット展覧会
 - 4-1. 「アール・ブリュット・イン・タイランド」展（日本・滋賀）実施報告
 - 4-2. 「アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン」展（タイ・バンコク）実施報告
 - 4-3. 事業成果

1. 事業概要

本事業は、国際交流基金アジアセンターの助成を受け、タイ王国において、アール・ブリュットの作品調査と専門家交流、さらにアール・ブリュット展覧会を実施することにより、アール・ブリュットに関する新たな解釈や価値の創造、アール・ブリュットを軸とした両国間のネットワークの構築を目的として、2016年度を通して実施しました。

(1) 作品調査事業

作品調査事業では、現地の障害者福祉施設への訪問取材や、現地で芸術療法家として活動されているジュンボン・チナプラパート氏からの紹介などを通し、アール・ブリュットの作り手たちに実際に出会い、その創作活動を調査してきました。そして、これまでに10名の個性豊かな作者たちと出会うことができました。

(2) 専門家交流事業

専門家交流事業では、現地でのディスカッションをはじめ、2016年11月、レインボールーム財団の代表を務めるロザリーナ・アレキサンダー氏を招聘し、同財団の事業についてご講演いただきました。レインボールーム財団は、障害のある子どもたちの家族を会員とし、子育て等の悩み事の相談窓口として機能する他に、障害のある人々のパフォーマンスイベントや写真展などを開催し、タイ王国内における障害のある人たちの地域生活支援に取り組んでいる団体です。また、2017年2月、前述のチナプラパート氏に、日本で開催した「アール・ブリュット国際フォーラム2017」にて、障害のある人との芸術を通じた関わりについてお話いただきました。さらに、3月8日にはチュラロンコン大学のミュージックホールを会場に、アール・ブリュットについて双方の国から計3名の専門家が講演するシンポジウムを実施しました。

(3) アール・ブリュット展覧会の開催

本事業における作品調査のなかで出会った作者を、日タイ双方の国で展示する展覧会を開催するなど、タイ王国のアール・ブリュットを積極的に発信しました。

2. アール・ブリュット作品調査

アール・ブリュットとは、フランスの美術家ジャン・デュビュッフエが 1945 年に提唱した概念であり、美術の専門的な教育を受けていない人が、伝統や流行などに左右されずに自身の内側から湧きあがる衝動のまま表現した芸術のことを指す言葉です。この芸術分野の中には、知的障害や精神障害のある人たちの創作した作品も多く含まれます。社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～では、これまで日本およびアジア地域でアール・ブリュット作品の調査・展示に取り組んできました。そして、2015 年からはタイにてアール・ブリュット作品の調査を始めました。

2-1. タイ王国でのアール・ブリュット作品調査について

本事業において実際に調査を進めていくうえでは、まず現地の福祉関係者、芸術関係者への聞き取りを実施し、そこから得た情報を基に、障害者福祉施設や、障害を持つ方の自宅に訪問し、アール・ブリュットの作り手を探すという方法を取り、10名の作者に出会うことができました。そして、この内、2名の作品を、展覧会でも紹介しました。



2016年2月 作者個人宅訪問時



2016年2月 作者個人宅訪問



2016年6月 現地アート・セラピスト活動拠点訪問時

2-2. 事業成果

(1) 調査結果

① 調査実施作者合計：10名

② 調査先と作者数内訳

調査場所	概要	人数
作者個人宅	チナプラパート氏の推薦する各個人宅に訪問。	6
カミリアン・ホーム Camilian Home	障害児を含む、孤児や家族の保護下から外れた児童を保護する非営利目的の施設。アート活動に取り組んでいる。 オフィシャルホームページ http://www.camillianhomelatkrabang.org/	1
ジュンポン・チナプラパート氏のアトリエ	チナプラパート氏が活動の拠点とするアトリエ	2
その他障害者施設		1

③ 作者一覧

パシン・シンサネー

※詳細は（２）展覧会出展者を参照のこと

ピッチャー・ラーサップチャーラーン

※詳細は（２）展覧会出展者を参照のこと

ヴィー

調査日：2016年2月24日

調査先：個人宅

作品：絵画

概要：独特のテキスタイルで、アルファベットのような文字を作成する。陶器でも作品を制作。

調査方法：チナプラパート氏の紹介により、作者自宅への訪問調査。本人と家族から聞き取りを実施。



ニュー

調査日：2016年2月24日

作品：絵画

調査先：個人宅

概要：アニメの登場人物のようなイラストを作成する。

調査方法：チナプラパート氏の紹介により、作者自宅への訪問調査。本人と家族から聞き取りを実施。



ドリーム

調査日：6月1日

調査先：カミリアン・ホーム

作品：絵画

概要：紙面上に自由かつ大胆に筆を走らせ、ドローイングを制作する。アート・セラピーを支援するスタッフに支えられ、のびのびと描く場を提供されている。

調査方法：カミリアン・ホームというタイ王国内でアート活動に取り組む福祉施設に取材調査。



ウォーム

調査日：2016年6月2日

調査先：個人宅

作品：絵画

概要：テレビの中の世界を描く。アナウンサーになるのが夢であり、ニュースの映像などそれに関係した映像を描くことが多い。独特の丸みを帯びた筆致で、人物を描くほか、ロゴの模写も得意とする。

調査方法：チナプラパート氏の紹介により、作者自宅への訪問調査。本人と父親から聞き取りを実施。



スパコーン

調査日：2016年6月2日

調査先：個人宅

作品：絵画、CG、立体

概要：コンピューターを用いたCG作品のほかに、自分の家にある材料を組み合わせ、自分の家にある材料を組み合わせ、立体的な作品を作っている。CG作品のテーマは、空想のテーマパークや、ロボットなど多岐にわたる。本人は美大に通っていた経験がある。

調査方法：チナプラパート氏の紹介により、作者自宅への訪問調査。本人と家族から聞き取りを実施。



ジヨム

調査日：2016年6月2日

調査先：ジュンポン・チナプラパート氏のアトリエ

作品：絵画、CG、立体

概要：現地でトムボーイ（女性でありながら、男性のファッションやふるまいをする）で呼ばれるトランスジェンダー的な生き方を選択した。内在する感情をアート・セラピーの中で、表現してきた。

調査方法：チナプラパート氏のアトリエ訪問時に、作品を見学。本人はバンコク市外におり、会えなかったが、チナプラパート氏より聞き取り。



ビージェム

調査日：2016年6月2日

調査先：ジュンポン・チナプラパート氏のアトリエ

作品：絵画、CG、立体

概要：アート・セラピーのセッションの中で作品を創作。チナプラパート氏曰く、この絵には作者の精神状態が現れている。

調査方法：チナプラパート氏のアトリエ訪問時に、作品を見学。本人はバンコク市外におり、会えなかったが、チナプラパート氏より聞き取りを実施。



(2) 展覧会出展作家

① パシン・シンサネー (Pasin Singhasaneh)

1990 年生まれ タイ・バンコク在住

彼の家族は、両親と二人の妹だ。旅をすること、You Tube を見ること、食べるのが好きな 25 歳である。彼は子どもの頃、精神科病院で心理療法を受け、その後特別支援学校を、両親の決断により 9 学年で卒業した。その理由は、両親が「この広い世界では、彼が彼らしく生きる場所があるはず」と思ったからだという。そして、絵を描くきっかけを作ってくれた芸術療法家のチナプラパート氏と出会うこととなる。二人の付き合いはもう 10 年になる。当初、彼は描くことには全く興味がなかったそうだ。彼の興味をそそるものはただ一つ、トイレで渦を作りながら流れていく水を見つめることだったが、彼の可能性を見つめ、それを応援することを大切にするチナプラパート氏とのコミュニケーションの中で、感じたことを直接表現できる手段として、彼は描くことを始めた。彼は今日も自宅の庭で、様々な色のアクリル絵の具を混ぜ合わせ、大きなキャンバスに悠々と描いている。



② ピッチャー・ラーサップチャーラーン (Pichaya Lertsapcharoen)

1994 年生まれ バンコク在住

ラーサップチャーラーンの作品には、ボールペンで人物と背景の輪郭を描き、色鉛筆で彩色する技法で描かれたものが多い。行為は一見簡潔だが、その制作過程には儀式やルールのようなものが存在している。彼女はまず、ボールペンで描きたいもののアウトラインを取る。この時点で彼女は製作途中の作品を彩色された完成作品とは明確に分け、別の場所——白い鞆の中にストックする。首の長い人物たちが並ぶこの下書き段階の絵は膨大な量があり、彼女はその中から適当な一枚を選び出し、彩色する。また時に作品同士が繋ぎ合わされて、大きなパッチワークへと変貌することもある。

医者を持つことから画中にも病院や看護師が多く登場する。その他のテーマもデパートやテレビの世界などの日常世界である。ラーサップチャーラーンは自身の日常を、カラフルでポップに彩り、人物たちに独自のデフォルメを施して、時には鼻歌を交えながら、こうするのが楽しくてたまらないという様子で描き続けている。



3. アール・ブリュット専門家交流

本事業では、前項で記述した作品調査と並行し、アール・ブリュットについて、両国の専門家らが見識を深めるための交流事業を行ってきました。

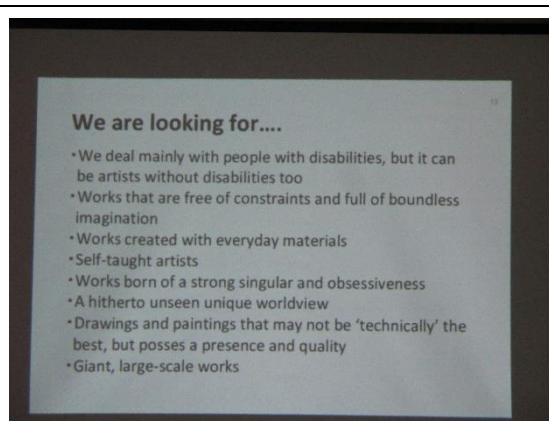
本事業では、日本側の専門家が、アール・ブリュットに関連した、美術や社会福祉、あるいはアート・セラピーなどの諸分野の専門家や団体を訪問し、「アール・ブリュットとはどのような芸術であるか」ということについてのプレゼンテーションを行い、直接自らの言葉で説明することから始まりました。この結果、アール・ブリュットという言葉こそ認知していなくとも、近しい思いを持った専門家や機関と出会い、日タイ間のネットワークを構築し、実際にタイ人専門家を日本に招聘するプログラムや、アール・ブリュット国際フォーラム2017での講演会、バンコク市内でのシンポジウムを実施しました。

3-1. 両国専門家による意見交換

本事業においては両国の専門家間で積極的に意見交換を行い、交流を図ってきました。具体的に交流を図ったのは、日本側からは、社会福祉法人愛成会常務理事兼アート・ディレクター、特定非営利活動法人はれたりくもったり アート・ディレクターなどの立場から様々なアール・ブリュット関連事業に関わる小林瑞恵氏に加え、社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～にて、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAの企画運営に関わる職員らが、タイ王国側からは、現地でアート・セラピストとして活動するジュンポン・チナプラパート氏、カウンセラー・セラピストのピヤチャット・ルーエンヴィセッシュ・フイニー氏、同王国内の障害者に対する意識向上に取り組むレインボールーム財団代表のロザリーナ・アレキサンダー氏、タイ王国に滞在する現代美術家の隅英二氏らが交流し、双方の立場からアール・ブリュットについて考察を深めていきました。



2015年5月 障害者施設での意見交換



説明時に使用したスライド



2016年11月ジッタメント幼稚園への訪問



2016年2月レインボールーム財団への訪問



2017年9月 チナブラパート氏のスタジオにて



2017年9月 美術家の隅英二氏とのミーティング

このように、近しい思いを抱きながらも、異なる出自をもった専門家たちとの交流は、本事業がアール・ブリュットの普及・発信に留まることなく、従来のアール・ブリュットの解釈に新たな視点を与え、更なる多様性を発見するきっかけとなりました。その成果は、タイ人専門家招聘プログラムや、アール・ブリュット国際フォーラムでの特別報告、バンコク市内でのシンポジウムといった形で発信しました。

3-2. タイ人専門家招聘プログラム

タイ王国での実践、日本での実践

2016年11月、タイ王国から、本事業の協力者である、レインボールーム財団代表のロザリーナ・アレキサンダー氏を招聘し、ご自身の取り組みについてのご講演を頂くと同時に、日本において造形活動に取り組む社会福祉施設への視察訪問を実施しました。

(1) 講演会の実施

日 時：2016年11月23日（水・祝）

15:00～17:00

講 師：ロザリーナ・アレキサンダー氏（レインボールーム財団代表）

聞き手：山田創（社会福祉法人グロー（GLOW）自立生活支援員）

会 場：奥村家住宅（滋賀県近江八幡市永原町上8）



講演では、レインボールーム財団がタイで行っている事業についてのプレゼンテーションがなされました。障害のある人の地位向上に取り組む同財団では、自閉症児に焦点を充てた写真展や、障害のある人々が演者となるパフォーマンスイベントを企画していることが説明されました。

(2) 造形活動に取り組む日本の社会福祉施設への視察

日 時：2016年11月22日

訪問先：びわこ学園医療福祉センター野洲、滋賀県立近江学園、オープンスペース
れがーと



滋賀県立近江学園



オープンスペース
れがーと



びわこ学園医療福祉センター草津

日本の福祉現場や障害のある人に対する造形活動支援の状況を知ってもらうため、三ヶ所の福祉施設への視察を実施しました。

3-3. アール・ブリュット国際フォーラム（日本・滋賀）での講演実施報告

名称：アール・ブリュット国際フォーラム 特別報告タイ 「タイでの取り組みについて」

講師：ジュンポン・チナプラパート Jumphol Chinaprapath

日時：2017年2月10日（金）15：15～16：05

場所：びわこ大津プリンスホテル コンベンションホール淡海

（滋賀県大津市におの浜4-7-7）

<プロフィール>

タイのバンコクで、自閉症やパーキンソン病のある人に向け、アートを活用し、それぞれの症状にあわせた芸術療法を実践している。2014年には重度の知的障害のある人の作品展「セルフ+アート・エキシビジョン・セラピー」を開催。生きづらさを抱える人たちの社会参加や、そうした人たちについての社会的な理解の促進を目的に活動を行っている。

<講演要約>

ある少女の作品

本日ご紹介するのは、私が何年も前に出会った一人の少女の作品です。この少女の作品が日を追うごとに素晴らしいものに変化していく様をみなさんにも感じていただきたいと思います。

これはまだ知り合ったばかりの頃の作品です（図1）。最初のころは鉛筆やペンで描いた色付けのないものが多かったのですが、作品を見て、彼女の持つ可能性、素晴らしい芸術性があることに驚きました。そして、私は彼女のご両親に「もっと絵を描いてみませんか？」と言いました。これは芸術家になるためではなく、自己表現やコミュニケーション支援に有益なもの、彼女の自身の意欲を引き出すひとつの方法だと思いましたので、ご両親にお願いしました。

同じ印を繰り返し描く理由

そして、描き始めるうちに私はあることに気がつきました。彼女の描く絵には腕は描かれているのに、その先の指がどの絵にもありません。また、腕のところについている丸い印がスタンプのようにどの絵にもあるので、それが何を表しているのかをずっと考えていました（図2）。彼女にも直接聞いてみました。しかし、「この印は何ですか」と聞いても、彼女はいつも何も答えませんでした。多くの場合、丸い印は赤っぽい色ばかりで他の色はあまりありません。私は、彼女が両親から虐待を受けているのではないか、その傷がずっと心に残

っていたのではないかと感じました。ある日、この考えを彼女のお母さんにも話しました。すると、お母さんは虐待ではない、おそらく父親と遊んだ時の思い出だろうと答えてくれました。実は、彼女のお父さんは医者なのです。父親と遊んだ時に、おそらく看護師の真似か、注射を受ける患者の真似かをしたのだと思います。この赤い印は注射の後だとわかりました。

同時に私は同僚にも聞いてみました。彼女のように、ある特殊なものを描く人はいますか？と。その人の経験や、いろいろなものからできた心の中の思い出が、そこに現れることはあるだろうと同僚たちも話していました。

作品の変化

時間がたつにつれ、上半身しか描かなかった彼女が下半身も描くようになってきました。ある日私は、このような素晴らしい彼女の絵を、もっと素晴らしいものになるのではないかと思います。ただ、この私のアイデアやアドバイスをどこまで受け入れてくれるのかは不安でした。しかし、彼女が私の意見を聞き入れてくれれば、この作品に大きな変化が現れると思いました。これは（一方的に）教えたのではなく、二人で話しながら絵を描いているうちに、こうした方がいいのではないかとアドバイスをしたということです。

私はある時、水色に塗った画用紙を指の形に切りました。彼女に「きれいな女性たちは、この指があるともっときれいに素敵に見えるでしょう。どうかな？」とアドバイスしました。彼女はしばらく考えて、この水色で塗った切り絵の指を自分が描いた絵の上に乗せました。その後、彼女は実際の人間の色でつくった指を自分の描いた絵に乗せました。それまでは水色ばかりを使っていましたが、ここで初めて肌の色を使ったんです。

注射のあとの赤い印についても、注射したあとはしばらく腫れて赤くなりますが、それはいつか治るよということを伝えました。この2つの話をした後の絵には手が付けられました。彼女自身も次第に、自分の創造能力に気付いたんでしょう。こういったものを発達させたという意味で、私は彼女の努力を尊敬しました。

彼女独特の色彩感覚や緻密さ、想像力でこういった絵が描けるようになりました。(図3) それは彼女自身の自己表現のひとつです。描く絵も、次第に、自分の身の回りに近いものになりつつあります。あるときは、自分自身も学生なので、学生服を着た女の子、テレビでみた俳優や歌手の絵。身近なものを題材として使っています。最初の頃は下絵を鉛筆かボールペンで描き、色鉛筆で塗っていましたが、そのうち、絵の具も使えるようになりました。

絵を描く生活

彼女は絵を描くことが大好きで一日中家にこもって絵を描いています。多くの作品は隣の部屋に山積みになっています。ある日私は中から一枚を抜き取って、「こんな絵を描いたんだね」と見たあと、一番上に戻すと、いつの間にか彼女はもとあった場所に差し入れました。彼女自身には下書きでも、その描いた順番があり、その絵にはストーリーがあるので、順番を乱してはいけなかったのです。彼女のお母さんに聞くと、下書きをした絵を大きな袋いっぱいに入れて、まるでサンタクロースのようにして二階にある自分の寝室へ毎日運ぶそうです。次の日、またアトリエに運んできて先ほどと同じようにテーブルの上に山積みにします。

芸術とは私たちに原動力を与えてくれ、いろいろな活力を与えてくれます。それは障害者であれ、健常者であれ、若者であれ、老人であれ、同じです。いろいろなものに感動を受けるのも人生の原動力となり、私たちを成長させてくれると思います。

彼女の場合も絵を描くことで多くを学び、成長してきました。例えば、生活の質の向上ももちろんですが、活動を通して社会との交流も始まり、情緒も安定してきました。なおかつ、彼女の描く絵は非常に芸術性が高く、多くの人から注目されつつあります。彼女自身がこれまで培ってきた努力で変わったのだとも言えるでしょう。私たちはほんの少しのお手伝いをしてただけだと思っています。

セルフ+アート・ボーダレス・アートミュージアム

ミュージアムという名前がまだ恥ずかしいくらい小さなものですが、一軒家を改装してアートミュージアムを造りました。素晴らしい絵を描く人たちが、ある時期になると社会に出て働くようになり、描くことを忘れてしまう。せっかく描いたすばらしい絵が誰の目にも止まらないまま埋もれてしまうことを大変危惧しています。ですので、なるべくたくさん集めて展示し、理解がある人たちに多くみてもらいたいと思って開館しました。ただ、タイはまだ日本ほど社会が十分に成熟しているとは言えません。社会が成熟しなくては、一般の人たちが関心を持ってくれないという現実もあります。でも社会は刻々と変化しているので、集めておくことに意義があると感じています。

本当に小さな家ですが、みんな違って当然という意味で、いろんな人の作品を集めてミュージアムとして展示しています。ぜひタイにいらしてください。ミュージアムもどんどん成長してくると思います。みなさんから受けるよい刺激を糧に大きく成長していきたいと思っています。



図 1



図 2



図 3



会場風景



会場風景

3-4. シンポジウム “アール・ブリュットを考える” (タイ・バンコク)

開催日：2017年3月8日

時 間：14:00-16:30

場 所：チュラロンコン大学ミュージックホール

入場料：無料

講演者：佐渡島志郎特命全権大使（在タイ日本国大使館）

小林瑞恵（社会福祉法人愛成会）

ジュンポン・チナプラパート（セルフ+アート・ボーダレス・アートミュージアム）

ピヤチャット・ルーエンヴィセッシュ・フィニー（カウンセラー、セラピスト）

司 会：ロザリーナ・アレキサンダー

シンポジウム概要

本シンポジウム「“アール・ブリュットを考える”」では、日タイのアール・ブリュットに関連して専門的な知識を持つ人々による講演プログラムを実施しました。

初めの登壇者である佐渡島志郎特命全権大使（在タイ日本国大使館）は、国内外のアール・ブリュット歴史の変遷に言及し、そして今回のように日本の「アール・ブリュット」の展覧会がASEANで行われるのは初めての良い機会であり、「アジア」の芸術を世界に広めていくとともに、「芸術」を障害者も含めたインクルーシブなものにしていきたいとのヴィジョンを語りました。さらに、日本政府によるアール・ブリュットに対する支援が始まっている中で、自身もこの一員となって応援していきたいとのコメントを残しました。

次の登壇者である小林瑞恵氏は、東京の社会福祉法人愛成会の常務理事兼アート・ディレクターとして活動し、これまでの多くのアール・ブリュット関連事業に関わってきた実績があります。こうした同氏の経験を踏まえて、語られた「日本のアール・ブリュット——その起源から現在まで」というタイトルの講演のなかで、小林氏は、日本のアール・ブリュットの歴史を振り返りつつ、本事業のような海外交流も含めたインターナショナルな視点から、アール・ブリュットを巡って現在巻き起こっている状況について解説が加えられました。

続いては、2月のアール・ブリュット国際フォーラムでも講演したジュンポン・チナプラパート氏の「タイ王国でのアール・ブリュットのはじまり」と題された講演です。タイ王国内で、アール・ブリュットが認知され、作者が発見されていく、まさにその流れを肌で感じつつ調査や展示などに関わってきたタイ王国のアール・ブリュット研究の第一人者ともいえるチナプラパート氏の視点から、王国内でのアール・ブリュット受容の状況について、または個別の作者についての分析がなされました。

そして、最後に登壇したフィニー氏は、「スパイダーウェブ——入り組んだ心」と題した講演を行いました。この講演の中では、アート・セラピストとしての自身の立場から、アール・ブリュットを分析していくことで見えてくる、作り手たち動機部分にあたる、彼らの心

の仕組みについて、言及しました。同氏はこの仕組みを、非常に複雑に入り組んでいながらも、繊細な構造を持つ「スパイダーウェブ（蜘蛛の巣）」に例えました。そして、隣接会場で開催されていた「アール・ブリュット・イン・ジャパン・アンド・タイランド」展で実施されていた展覧会の作品を追いながら、講演が行われました。



佐渡島志郎 特命全権大使



小林瑞恵



ジュンポン・チナプラパート氏



ピヤチャット・ルーエンヴィセッシュ・フィニー



司会：ロザリーナ・アレキサンダー



会場風景



3-5. 事業成果

(1) 各催事について

- ① タイ人専門家招聘プログラム 日タイアール・ブリュット交流記念事業

参加者数：19人

- ② アール・ブリュット国際フォーラム 特別報告2タイ ジュンポン・チナプラパート「タイの取り組みについて」

参加者数：89人

感想（回収アンケートより一部抜粋）

- ・日本と文化や経済状況は異なるが障害者を取りまく環境や支援者には共通のものがあると感じる。（20代、女性）
- ・話が分かりやすくてよかった。福祉施設での実践では集団支援がメインなので個人に特化して変化をとらえることがなかなか難しいので丁寧に、小さな変化を追う取り組みも大事だと改めて思った。（30代、女性）

- ③ シンポジウム「アール・ブリュットを考える」

参加者数：117人

感想（回収アンケートより一部抜粋）

- ・アール・ブリュットがより広範に伝わっていくべきだと感じた。（50代、女性）
- ・登壇者の講演内容は素晴らしいものであった。（30代、女性）

(2) その他

調査や講演などで本事業に関わり、本年度を通して交流を図ったジュンポン・チナプラパート氏が、アール・ブリュットを展示するための美術館「セルフ+アート・ボーダレス・アートミュージアム」の開館を決定しました。2017年3月現在、開館準備中です。

2017年2月には、オープン前企画として、バンコク市内のギャラリーであるブリディ・バノムヤン・インスティテュートにて、「セルフ・アート・ボーダレス・ミュージアム」展を実施しています。

このように、準備段階も含め、2015年から本事業の実施を通して、連携を図ってきた専門家が、アール・ブリュットの重要性を十分に理解し、開館の準備を進めていることは、専門家交流事業の大きな成果であると考えます。



展覧会ポスター



パシン・シンサネー展示風景



会場風景



会場風景

4. アール・ブリュット展覧会

本事業では、二つの展覧会を実施しました。まずは、国内、滋賀県大津市で実施した「アール・ブリュット・イン・タイランド」展です。こちらは、2017年2月10日（金）～12日（日）にかけて実施された福祉フォーラムであるアメニティフォーラムと同会場にあたるびわ湖大津プリンスホテル内で開催されました。同ホテル内では、本展以外にも、滋賀県のアール・ブリュットを紹介する「シガカラー3」展と、日本国内のアール・ブリュットを紹介する「ライフワークイズム」展が同時に実施されており、来場者は多くの日本のアール・ブリュット作品と並行し、タイ王国に焦点を置いた本展の内容を見ることとなりました。

次に、タイ王国のバンコク市において、「アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン」展を実施しました。2017年3月3日（金）、バンコク市に位置するチュラロンコン大学敷地内に立地するチュラロンコン大学ミュージアムにて、「アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン」展がオープンしました。本展は、タイ王国、日本、両国から合計8名の作者による90点以上の作品を展示し、3月26日（日）に終了しました。

4-1. 「アール・ブリュット・イン・タイランド」展（日本・滋賀）実施報告

展覧会名：アール・ブリュット・イン・タイランド

概要：本年度のタイでのアール・ブリュット調査の中で発掘されたピッチャー・ラーサップチャーラーンの絵画作品・立体作品を展示し、タイで生まれたアール・ブリュットを日本国内で紹介した。

会期：2017年2月10日（金）～2017年2月12日（日）

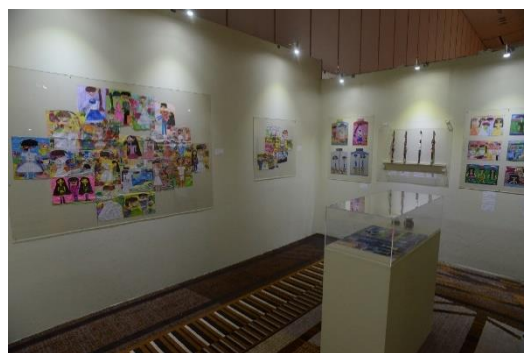
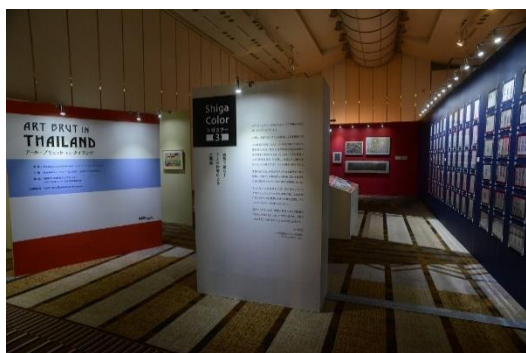
時間：9：00～21：00（最終日は14：00まで）

場所：びわ湖大津プリンスホテル コンベンションホール淡海

観覧料：無料

出展者：ピッチャー・ラーサップチャーラーン

展覧会風景



展覧会会場

展覧会風景



作者（ラーサップチャーラーン氏）と作品

作者、家族、チナプラパート氏と

4-2. 「アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン」展（タイ・バン
コク）実施報告

展覧会名：英：ART BRUT IN THAILAND AND JAPAN

日：アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン

概要：日本のアール・ブリュット作者 6 名の作品と、タイのアール・ブリュット作者 2 名の
作品を約一か月にわたり展示

会期：2017年3月3日（金）～2017年3月26日（日）

開館時間：9：00～16：30

休館日：土・日

場所：チュラロンコン大学ミュージアム 1階展示室

観覧料：無料

出展者：

【日本】

小幡正雄 Obata Masao

澤田真一 Sawada Shinichi

鮎万里絵 Suzuki Marie

戸舎清志 Toya Kiyoshi

本岡秀則 Motooka Hidenori

山崎 健一 Yamazaki Kenichi

【タイ】

パシン・シンサネー Pasin Sinsaghaneh

ピッチャー・ラーサップチャーラーン Pichaya Lertsapcharoen

実施体制

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、社会福祉法人グロー（GLOW）～生きるこ
とが光になる～

共催：社会福祉法人愛成会

社会福祉法人はる

社会福祉法人みんなで生きる

社会福祉法人八ヶ岳名水会

社会福祉法人ゆうゆう

特定非営利法人楽笑

後援：在タイ日本大使館、タイ アジア太平洋障害者センター（APCD）、

協力：アート・コネクション、NPO 法人はれたりくもったり、レインボールーム財団、セル
フ・アート・ボーダレス・アートミュージアム

展覧会とそのコンセプトについて

本展では、タイ王国と日本双方の国で生み出されたアール・ブリュット作品を紹介することで、より多くの人に向けて、この芸術の周知に繋げ、障害のある人など、これまで美術の文脈の中では評価されてこなかった人々が、独自の才能を発揮できるような機会を作っていくと同時に、両国の文化教育交流活動の発展及び両国の関係の緊密化を目指しました。

そして、1,030人の多くの人にご来場いただき、また現地のテレビ局や新聞、ネットニュースなどにも本展が紹介されるなど、注目を集めました。

異国でのアール・ブリュット展を実現するまで

本展開催に向けた動きとしては、タイ王国内で、展示会場を探すところから始まりました。バンコク市内のギャラリーやアートセンター内の貸しスペースなどが候補に挙がりましたが、最終的には、タイ王国の将来を担っていく学生世代の人々にも見ていただきたいとの思いが後押しし、タイ王国屈指の歴史を誇るチュラロンコン大学内のチュラロンコン大学ミュージアム1階の企画展示スペースでの展覧会開催を決めました。

出展する作者については、日タイ双方の国からアール・ブリュットのアーティストを選出しました。日本側からは、小幡正雄、澤田真一、鮎万里絵、戸舎清志、本岡秀則、山崎健一の6名を選出しましたが、この6名はこれまで多くの展覧会に出展した実績があります。彼らを選んだ背景には、まだアール・ブリュットの知名度が高くないタイ王国という土地だからこそ、日本国内で既に高く評価されている素晴らしいアール・ブリュットの作品を展示し、その魅力をより強く伝えたいとの思いがありました。

タイ王国側の出展者には、2015年から開始した作品調査の中で出会った作者パシン・シンサネーとピッチャー・ラーサップチャーラーンの2名を選出しています。調査を続けていく中で出会うことのできた彼らの非常に魅力的な創作を「タイ王国のアール・ブリュット」として、是非とも発信したいと考えたことから、この2名を展示することを決定しました。このようにして、日タイからそれぞれ魅力あふれるアール・ブリュットの作者8名が決定し、オープンに向けての準備が進んでいきました。

さらに、展覧会の実現に際しては、多くの関係機関に援助を頂きました。共催団体として、日本から本展覧会をサポートしていただいた、社会福祉法人愛成会、社会福祉法人はる、社会福祉法人みんなで生きる、社会福祉法人八ヶ岳名水会、社会福祉法人ゆうゆう、特定非営利法人楽笑をはじめとし、タイ王国内でも、本事業の意図にご理解を頂き、ご賛同くださった現地の機関からの多大なる協力がありました。

とりわけ、展覧会の監視ボランティアのマネジメントや、現地メディアへの広報アピールなど、日本国内からではなかなか手の届きづらい部分を、タイ王国内の協力機関になっていただいたことは、具体的に展覧会実現に向けた大きな力添えでした。

アール・ブリュットを「見る」ことで分かること

アール・ブリュットは、いくら言葉を尽くしても伝わらない部分があります。本事業でも、調査員が福祉現場や関係機関に赴き、アール・ブリュットについての説明をする場面が多数ありましたが、実際には展覧会を見ていただくことが、この芸術の力を知っていただくのには、一番の近道ではないでしょうか。

こうした思いもあり、今回実際にアール・ブリュットを「見る」ことができる展覧会を開催したことは、タイ王国の人々に向けて、アール・ブリュットの周知に繋げ、障害のある人などが芸術分野で注目されていくきっかけを作っていくことを目標の一つに掲げる本事業にとって、大きなステップであったと感じています。



日本人スタッフによる設営風景



タイ人スタッフによる設営風景



会場チュラロンコン大学ミュージアム



展覧会オープニング テープカット



会場屋外看板



会場内風景



会場内風景



会場内風景



会場内風景



会場内風景



会場内風景



会場内風景



チナプラパート氏による展示レクチャー



小林瑞恵氏による展示レクチャー



ワークショップ会場風景



ワークショップ会場風景

4-3. 事業成果

1. 「アール・ブリュット・イン・タイランド」展

開場日数：3日

来場者数：1,468人

一日平均来場者数：489.3人

感想（回収アンケートより一部抜粋）

- ・色鉛筆を最後まで短くなるまで、使っていてすごいなーと思いました。（13～19歳、女性）
- ・作品が心にのこりました。（12歳以下、女性）

2. 「アール・ブリュット・イン・タイランド・アンド・ジャパン」展

開場日数：19日

来場者数：1,030人

一日平均来場者数：54.2人

感想（回収アンケートより一部抜粋）

- ・展示されている作品以外にもより多くのアール・ブリュット作品を見たいと感じた（40代、女性）
- ・タイ王国で、日本の作品を見ることが出来てとても嬉しかった。両国の作品はともに素晴らしかったです。（20代、女性）
- ・もっと多くのアール・ブリュット展が開催されてほしい。